

げられる。一つは1986年大会（東邦大学）の「都市環境に生息する鳥類の生態」、もう一つは鳥学会後援による「都会の鳥たちの夜」（立教大学1990）である。前者は内田康夫・川内博・杉森文夫が話題提供し、鳥類が都市進出をした原因、都市に於ける人と鳥の共存などが討議された。鳥類にとっての代替え環境として都市（内田康夫）、人を恐れなくなった鳥（森岡弘之）、未開拓の都市環境への新たな適応現象としての都市鳥（平川浩文）、新たな鳥類群集の形成過程としての都市鳥（中村登流）など、都市鳥への興味と認識を深めた。また、後者では、唐沢孝一・中村一恵・越川重治・大庭健二が話題提供し、都市鳥の時の機能や構造、重要性等について論議した。

(3) 今後の展望

都市鳥研究会は1982年に発足以来約30年、都市に於ける鳥類相の変化、生態・習性の特性、人

との共存や対立、あるいは都心のカラスやツバメの個体数変動などをモニタリングするなどしてきた。都市化・人工環境化、あるいは都市再開発などは、今後も地球規模で進行する問題であり、時代と共に絶えず変化していく都市環境に鳥類がどのように適応し、人との折り合いをつけていくのかは、鳥類研究者だけでなく都会人にとって興味あるテーマである。本研究会は創立30年の2012年より代表を唐沢孝一から川内博に交代し、新体制のもとで再スタートすることになった。ホームページ（<http://urbanbirds.eco.coocan.jp/>）を立ち上げ、国内外の最新都市鳥情報の収集にも取り組んでいる。都市鳥の生態に関心のある鳥学会会員の参加を期待しているところである。また、今後も可能なかぎり都市鳥情報を集め、調査を継続し、後世の都市鳥研究のために記録を積み重ね、活動の輪を次の世代に引き継ぎたいと思う。

鳥害研究への取り組みと応用鳥学研究会

中村和雄

1. 鳥害研究室の発足

1980年10月、農林水産省農業試験場畑作研究センター（後に、農業研究センターとなる）内に、鳥害研究室が設立された。これは、鳥害を研究対象とした研究室としては、わが国最初のものであった。

それまで、農作物の鳥による被害に関する研究は、鳥獣研究者によってなされたものが、「鳥獣調査報告」、「鳥獣集法」（農林省林野庁発行）や、「応用鳥学彙報」（山階鳥類研究所発行）などに発表されており、また主として害虫研究者による研究が、各種の害虫関係の雑誌に掲載されてきた。しかし、それらは散発的であって、系統的な研究がなされては来なかった。

鳥害研究室の発足は、鳥害を対象とした組織だった研究が開始されたことを意味した。

2. 鳥害研究室が取り組んできたこと

鳥害研究室の設立は、稲作の代替作物であるダイズやトウモロコシ（家畜の飼料）に対するハトやカラスの加害や、カラスやヒヨドリなどによる果樹や野菜の加害が深刻化してきたことによる。

このため、当座の目標は、ハト類によるダイズの被害回避とヒヨドリによる加害発生要因の解明においた。これと並行して、わが国内外の鳥害の状況と過去に発表された鳥害関係の文献の収集を行って、鳥害研究の方向を位置づけた（中村・松岡1981-82）。

図1は、同じ畑に継続してダイズを播いていったとき、キジバトに子葉を摂食されたダイズ株の割合を示したものである。4月下旬から5月中旬くらいの間は、非常に高い被害株率を示しているが、5月下旬からは被害株率は0%近くになっている。ちょうどこの頃、大麦が収穫期を迎え、畑には大量の種子が落下する。キジバトは、ダイズ畑から麦畑へ餌場を転換したためであると考えられる。

このことから、鳥による被害は、畑に存在する鳥の餌量とその地域に存在する鳥が摂食可能な餌量に比べて大きくなったとき生じるといえる。言い換えれば、鳥の被害の強さは、摂食可能な餌量に対する畑の餌量の比率によって決まるということである（松岡・中村1987）。この原理は、様々な刺激を用いて畑から鳥を追い払う場合にも重要

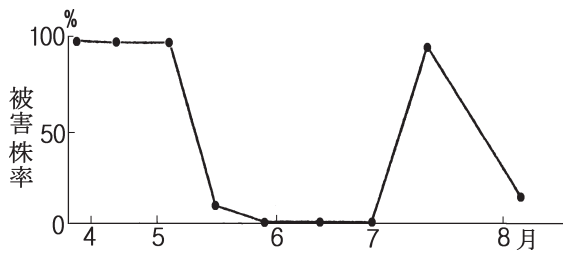


図1. ダイズの出芽時期とキジバトによる被害株率 (1982年, 農研センター圃場; 松岡・中村 (1987) より改変して転載).

な意味を持つ。こうした追い払い法の効果は、畑の餌量の比率によって決まるからである。

3. 鳥害研究会での活動

鳥害研究室には、全国からたくさんの問い合わせの電話がかかってくる。その半分は、農作物の鳥害に関してのものであるが、残りは航空会社 (Bird Strike)、電力会社、一般の方からのものなどである。これらの中には、新たな種による新たな被害を報じるものもあって、貴重な情報源であっ

た。そこで、1987年に全国の鳥害研究の関係者に呼びかけて、鳥害研究会 (後に、応用鳥学研究会に改称) を設立して「鳥害研究会ニュース」 (後に、「応用鳥学ニュース」) を発行した (研究会は、現在休眠中)。

また、日本鳥学会大会その他において、小集会を開催し、「鳥と人間生活との係わり」 (1991年)、「カラスシンポジウム: カラス、人とは一緒に住めないの?」 (1992年)、「各種の鳥害と対策」 (1993年) などの話題を取り上げて、講演と討論を行ってきた。これらの活動は、わが国の鳥害の現状の認識を深め、応用鳥学研究の道筋を示すために、いくばくかの役割を果たしたものと思う。

引用文献

- 中村和雄・松岡 茂 (1981-82) 農作物の鳥害防止への道 (1)~(6). 農業技術 36-37.
 松岡 茂・中村和雄 (1987) ダイズのハト害の季節変動とその要因. 日鳥学誌 36: 55-64.

鳥ゼミ (東京) の 23 年

上田恵介 (立教大学理学部)

鳥ゼミがはじまって今年で23年になる。回数もこの4月で211回。よく続いてきたなと思う。私が立教大学に職を得て、大阪から東京にやってきたとき、東大秩父演習林 (当時) の石田健さんと、関東のあちこちで鳥を研究している人たちを集めて研究会をしようという話がまとまった。

場所は立教大学の旧12号館。私が赴任したときはまだ一般教育部 (教養課程) があって、私も含めて一般教育部の教員の研究室は旧12号館に集まっていた。この建物は、大正時代に建てられたビルディングで、あの関東大震災をくぐり抜けたというとても古色騒然たる頑丈な建物であった。1階は当時、立教中学校の校舎として使われていて、その2階の会議室がゼミの場所だった。時々、東大 (一度は目黒の自然教育園) に会場を移して行うことはあったものの、ほとんど立教大学を会場に開催してきた。そして二次会はいつも池袋駅西口の中華 (台湾) 料理店が定番だった。

はじめ、ゼミは輪読会から始まった。石田さんの提案で Grant 夫妻のガラパゴスフィンチの個体

群動態に関する本を、ゼミの参加者で分担して読み切った。『フィンチの嘴』もまだ訳が出ていなかった頃のことである。

鳥ゼミをはじめから1993年くらいまでは、一部にunix機やパソコンでメールを使えるメンバーはいたものの、メールはほとんど使われていなかった。だから鳥ゼミの案内はほとんど郵送で、一部はファックスで送っていた。

12月は忘年会である。鳥ゼミの忘年会は、その1年に、メンバーが国内、国際、さまざまな学会で発表したりサイクルポスターを貼って、その前でワインやビールを飲みつつ、じっくり議論するという趣向であった。おつまみや料理も各自が持ち寄るポトラック形式で、気楽な雰囲気のお金も安い) 会であった。このポトラック形式は最近では定例ゼミにも定着し、毎回、ゼミの後は、皆が持ち寄ったワインや自家製ビールや、おいしい手作り料理で、懇親会が盛り上がっている。

鳥ゼミでは海外からの研究者を招いて話題提供をお願いすることもある。東大の樋口広芳さんの